特異項目機能を適用した日本と中国の大学生の自覚ストレスと効果的なストレスマネジメント行動の変容ステージの比較

○鄧 科¹ 津田 彰² 金ウィ淵³ 松田輝美⁴

(1久留米大学比較文化研究所・2久留米大学文学部・仁荷大学教育学部・久留米大学心理研究科)

キーワード：特異項目機能、ストレスマネジメント行動、変容ステージ

Comparison of perceived stress by differential item functioning and stages of change for Japanese and Chinese students

Ke DENG¹, Akira TSUDA², Euiyeon KIM³, and Terumi MATSUDA⁴

(1Institute of Comparative Studies of International Cultures and Societies, Kurume University, 2Department of Psychology, Kurume University, 3Department of Education, Inha University, 4Graduate School of Psychology, Kurume University)

Key Words: differential item functioning, stress management behavior, stages of change

目 的

多くの自覚ストレス比較が古典的テスト理論を適用した結果から報告されている (e.g., 小山他, 2012)。自覚ストレス比較をより正確に検討するには、各集団における尺度や項目の等質性が求められる。そこで、各集団の特性・能力が等しいにもかかわらず、各集団によって回答率が異なる特異項目機能 (differential item functioning; 以下 DIF) が集団間の比較を調査するために用いられてきた (OECD, 2009; 高橋他, 1998; 野口他, 2007)。

多理論統合モデル (trans theoretical model, TTM) の実証研究の中、日中学生において、日常生活の中で効果的なストレスマネジメント行動の変容ステージが異なり、自覚ストレスや抑うつなどのストレス反応が低減と関連がすると報告されている (堀内他, 2009; トウ他, 2012)。

日中学生間の自覚 ストレス得点の差異に影響する一因として、日中学生の効果的なストレスマネジメント行動の分布の差異があるからと考えられる。DIF を検討し、等質性がある項目を用いて日中学生間の自覚ストレスの差異を明らかにした上で、効果的なストレスマネジメント行動の分布の差異を検討するのが重要である。

仮説として、1. 日中学生間に自覚ストレス項目の DIF が検出される。2. 日本人学生の自覚ストレス得点が中国人学生より低い。3. 日中学生のストレス得点の差異は、効果的なストレスマネジメント行動の実践および意図の有無の差異により異なると考えられた。このため、本研究の目的は、自覚ストレス尺度の DIF 項目を検討し、文化差や特性など見られなかった項目を用いて日中学生間の自覚ストレスを比較することであった。さらに、日中学生間の効果的なストレスマネジメント行動の変容ステージの分布の差異を検討した。

方 法

対象者および手続き

大学生および専門学校生約 1404 名に質問紙調査を実施した。欠損値ない 924 名 (日本 467 名、中国 457 名、平均 20.9 ± 2.5 歳) を分析対象とした。

尺度

1. 効果的なストレスマネジメント行動の変容ステージ (Prochaska & DiClemente, 1983): ストレスマネジメント行動の実践及びその意図によって、次の 5 つの変容ステージを評価した。各ステージは 6 ヶ月以内に実践するつもりがない前熟考期、6 ヶ月以内に実践するつもりがある熟考期、30 日以内に実践するつもりがある準備期、実践し始めて 6 ヶ月以上の実行期、実践し始めて 6 ヶ月以上の維持期の 5 つである。

2. Perceived Stress Scale (PSS) (Cohen et al.,

1983): 最近一か月間の状態を質問し、5 件法 (0~4 点) で評価した。総得点 (0~56) が自覚ストレス度を示し、高得点であるほど自覚ストレスが強いことを表す。

統計解析

EasyDIF (熊谷, 2012) を用い、PSS の DIF 分析を行った。指標 K が DIF の存在を警告する指標であり、K 値 (カテゴリ数 - 1 × 0.1) が 0.4 を上回った項目を DIF と判断した。t 検定で日中の PSS 得点を比較した。さらに、日中両国の変容ステージ差について、 χ^2 検定を検討した。

結 果

PSS の項目 3、6、7、9、12 の K 値が 0.4 以上となり、DIF と判断した。項目 2 は項目母数の推定に失敗しているため DIF の検出ができず、今回除外対象にした。残りの PSS 項目 1、4、5、8、10、11、13、14 で行った t 検定の結果は、日本人学生のストレス得点が中国人学生の得点より有意に高かった ($t(922)=4.71, p=0$)。国別で学生のストレスマネジメント行動の実施および意図の有無について関連性を見るために χ^2 検定を行った結果は有意であった ($\chi^2(4, N=810)=60.64, p=0$)。残差を見ると、中国は日本に比べて、前熟考期の者が少なく、実行期の者が多かったことが示された (図 1)。

考 察

仮説 1 において、日中学生間に PSS 項目の DIF が検出されたことから、日中学生が自覚ストレス項目に対する異なる受け取りがあると示された。仮説 2 に関して、DIF を検討した上で、日本人学生より中国人学生の得点が低かった結果得られ、小山他 (2012) の結果と一致した。しかし、本研究では DIF 分析により得られた文化差や特性など見られなかった PSS 項目からの日中学生間の自覚ストレスの差が、先行研究より頑健な知見と言える。最後に、変容ステージ比較の結果から、日本において、効果的なストレスマネジメント行動の実践および意図のある学生を増加すれば、日本人学生のストレス得点が低くなっていく可能性が示唆される。

図1 日中と中国の学生のストレスマネジメント行動の変容ステージの分布

* 本研究は、平成 22 年度日本学術振興会科学研究費助成基盤研究(B)「心理的ウェルビーイングのポジティブ健康心理学的研究—多施設共同研究—」(研究代表者: 津田 彰, 課題番号: 22330196) の援助を受けた。